

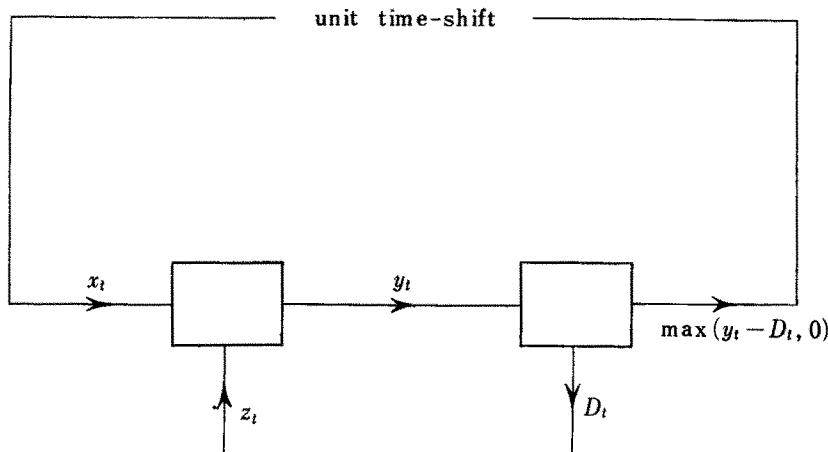
在庫管理の Dynamic Programming

電気通信大学数学研究室 坂 口 実

1. 数学的 model

在庫管理の問題で数学的 model を作り、それを dynamic programming の方法で解析することは、Bellman その他の多くの研究(Econometrica, Operations Research, Management Science などに散見)がある。

数学的 model は下に示すような一つの多段決定過程である。



x_t : 第 t 期首における initial stock

y_t : 第 t 期首における starting stock

$z_t = y_t - x_t$: 第 t 期首における order の量(≥ 0)

D_t : 第 t 期中における需要量、一般に或る確率過程に従う。

確率的漸化式

$$x_{t+1} = \max(x_t + z_t - D_t, 0)$$

において、需要量 D_t が random term、注文量 $z_t = z_t(\cdots, D_{t-1}; x_t)$ が controlling term のとき、損失函数の期待値

$$\sum_t a^t E [W_t(x_t, y_t; D_t)]$$

(有限又は無限の和、 $0 < a \leq 1$ は割引率)を、或る適當な意味で最小にしようとする。最適決定 z_t 、あるいは y_t は各 t に対し x_t の函数となることはいうまでもない。最適決定の時系列 $\{z_t\}_{t=1}^{\infty}$ 、 $\{y_t\}_{t=1}^{\infty}$ をそれぞれ最適注文政策、最適在庫政策という。

いま最も簡単な場合を考えて、 $\{D_t\}$ が同一分布に従う独立確率変数列で、密度函数 $\varphi(v)$ が既知とする。さらに W_t は皆同じ W とし

$$E\{W(x, y; D)\} \equiv g(y - x) + \int_y^{\infty} \psi(v, y) \varphi(v) dv$$

ただし, $g(z)$ ……量 z の注文に対する注文費用

$\psi(v, y)$ ……在庫量 y のとき過大需要 $v (> y)$ に対する penalty cost

$\varphi(v)$ ……需要量分布の密度函数

とするとき

$u(x)$ ……initial stock x のとき最適注文政策を用いたときの total cost

とおくと

$$u(x) = \min_{y \geq x} \left[g(y - x) + a \left\{ \int_y^{\infty} (\psi(v, y) + u(0)) \varphi(v) dv + \int_0^y u(y - v) \varphi(v) dv \right\} \right]$$

の形の函数方程式が得られる.

ここで次の仮定がおかれていていることに注意する:

- (i) 政策決定者は注文をするかしないかの何れかで, 返品は許されない. すなわち $y_t \geq x_t$.
- (ii) 注文がなされたときは, その全部の量が即座に引渡される.
- (iii) 注文は期首に行なわれ, 需要はその期の期末に集中して生ずると考える (penalty cost は次期費用に算入される).
- (iv) 需要量の従う確率分布法則が既知である.

これらの仮定は, 現実の事態に適応するためには, 漸次取除き, あるいは修正されねばならない.

したがって, O.R. 研究者にとって, 此の方面で今後に望まれる仕事は

- ① 数学的 idealization をできるだけ外して, 実際の場合の設定に近づけること.
- ② 特に, 需要量分布が partially known のときの数学的取扱い.
- ③ 既に得られている数学的な一般定理を, 個々の場合に適用して, 直ちに使用し得るような具体的な形にすること.

などである. この小報文もこれらの方向における一つの little contribution である.

2. 諸 結 果

注文費用および penalty cost が何れも比例的 (比例係数それぞれ k, p) な場合の最適在庫方程式は

$$u(x) = \min_{y \geq x} \left[k(y - x) + a \left\{ \int_y^{\infty} (p(v - y) + u(0)) \varphi(v) dv + \int_0^y u(y - v) \varphi(v) dv \right\} \right] \quad (1)$$

である. 両辺に -1 を掛けて $-u(x)$ を改めて $f(x)$ とおくと

$$f(x) = \max_{y \geq x} \left[-k(y - x) + a \left\{ \int_y^{\infty} (p(y - v) + f(0)) \varphi(v) dv + \int_0^y f(y - v) \varphi(v) dv \right\} \right] \quad (1)'$$

となる。したがって(1)と

$$f(x) = \max_{y \geq x} \left[-k(y-x) + (py + af(0)) \int_y^\infty \varphi(v) dv + \int_0^y (pv + af(y-v)) \varphi(v) dv \right] \quad (2)$$

との最適政策は同じ構造である。何故なら(1)'と(2)との差異は、(1)'で p を p/a に替えると

$$p \int_y^\infty v \varphi(v) dv + p \int_0^y v \varphi(v) dv$$

に過ぎず、この量は y に関しては定数であるからである。

(2)の意味： p が今度は単位量当たり売価、 $f(x)$ が initial stock x のとき最適注文政策を用いてみこみ得る最大収益を表わす。

条件 $0 < a < 1 ; \varphi(v) > 0, \int_0^\infty v \varphi(v) dv < \infty$ のもとに

[定理 1] (2)は(1)のそれと同じ構造の最適政策をもつ：すなわち、 $p > k$ ならば

$$y^*(x) = \max(\bar{x}, x)$$

ここに \bar{x} は

$$k = \left(p \int_y^\infty + ak \int_0^y \right) \varphi(v) bv$$

の唯一つの正根。 $p \leq k$ ならば

$$y^*(x) \equiv x \quad (\text{全然注文しない}).$$

次に(1)において、比例的な保管費用(係数 c)が加わった場合の方程式は

$$u(x) = \min_{y \geq x} \left[cy + k(y-x) + a \left\{ \int_y^\infty (p(v-y) + u(0)) \varphi(v) dv + \int_0^y u(y-v) \varphi(v) dv \right\} \right] \quad (3)$$

となる。

[定理 2] 方程式(3)に対して

(i) 最適在庫政策は、 $ap > c + k$ ならば

$$y^*(x) = \max(\bar{x}, x)$$

ここに \bar{x} は

$$c + k = a \left(p \int_y^\infty + k \int_0^y \right) \varphi(v) dv \quad (4)$$

の唯一つの正根。 $ap \leq c + k$ ならば

$$y^*(x) \equiv x \quad (\text{全然注文しない}).$$

$$(ii) \quad u(\bar{x}) = cx + \frac{a}{1-a} \left(p \int_{\bar{x}}^\infty + k \int_0^{\bar{x}} \right) v \varphi(v) dv, \quad (5)$$

$$u(0) = k\bar{x} + u(\bar{x}),$$

が成立する。したがって

$$\lim_{a \rightarrow 1} (1-a)u(\bar{x}) = \lim_{a \rightarrow 1} (1-a)u(0) = \left(p \int_{x_0}^{\infty} + k \int_0^{x_0} \right) v \varphi(v) dv \quad (6)$$

が成立する。ここに x_0 は

$$\int_{x_0}^{\infty} \varphi(v) dv = \frac{c}{p-k}$$

の唯一つの正根である。

(例) 需要分布が指数分布

$$\varphi(v) = be^{-bv}, \quad b > 0$$

のとき、(4)から限界水準 \bar{x} は

$$\bar{x} = \frac{1}{b} \log \frac{a(p-k)}{c + (1-a)k}$$

となる。これは変形して

$$\bar{x} = \frac{1}{b} + \sqrt{\frac{1}{b^2} \log \frac{a(p/k - 1)}{(c/k + (1-a))e}}$$

である。ここに $1/b$ は需要密度 $\varphi(v)$ の平均値、 $1/b^2$ は分散である。さらに(5)(6)から、それぞれ

$$u(\bar{x}) = u(0) - k\bar{x} = c\bar{x} + \frac{a}{1-a} \left\{ \frac{k}{b} + (p-k) \left(\bar{x} + \frac{1}{b} \right) e^{-b\bar{x}} \right\},$$

$$\lim_{a \rightarrow 1} (1-a)u(\bar{x}) = \lim_{a \rightarrow 1} (1-a)u(0) = \frac{1}{b} \left(c + k - c \log \frac{c}{p-k} \right),$$

を得る。

今度は最適在庫政策が二水準政策(two-bin policy)になる例として、注文費用および penalty cost がそれぞれ一定値 K, M 、需要が $(0, S)$ での一様分布に従うときを考える。最適在庫方程式は

$$u(x) = \begin{cases} \min_{x \leq y \leq S} \left[K \operatorname{sgn}(y-x) + a \left\{ (M+u(0)) \left(1 - \frac{y}{S} \right) + \frac{1}{S} \int_y^S u(y-v) dv \right\} \right], & 0 \leq x < S, \\ \frac{a}{S} \int_0^S u(x-v) dv, & x \geq S. \end{cases} \quad (7)$$

[定理 3] 方程式(7)に対する最適在庫政策は、 $M > K(e^a - 1)^{-1}$ ならば

$$y^*(x) = \begin{cases} S, & 0 \leq x < \bar{x} \\ x, & x \geq \bar{x} \end{cases}$$

となる。ここに

$$\bar{x} = S \left\{ 1 - \frac{1}{a} \log \left(1 + \frac{K}{M} \right) \right\} \quad (8)$$

である。さらに

$$u(x) = \begin{cases} u(0), & 0 \leq x \leq \bar{x} \\ u(0) + M(1 - e^{a(x-\bar{x})/S}) & \bar{x} \leq x < S \end{cases} \quad (9)$$

ただし

$$u(0) = \frac{M}{1-a} \log\left(1 + \frac{K}{M}\right)$$

である。

最後に、注文に対する引渡しに単位期間の遅れがある場合は、最適在庫政策は定水準政策にならない。このときの方程式は

$$u(x) = \min_{z \geq 0} \left[cx + kz + a \left[\int_x^\infty (p(v-x) + u(z)) \varphi(v) dv + \int_0^x u(x-v+z) \varphi(v) dv \right] \right] \quad (10)$$

となる。 c, k, p はそれぞれ比例的な保管、注文、penalty 費用の比例係数である。第一期の需要に見合うべき量は x であって y ではない。 (10) に対する最適注文政策は、 $a^2p > k + c$ ならばある適当な数 \bar{x} 、および $z(\bar{x}) = 0$ なる非負減少函数 $z(x)$ に対して

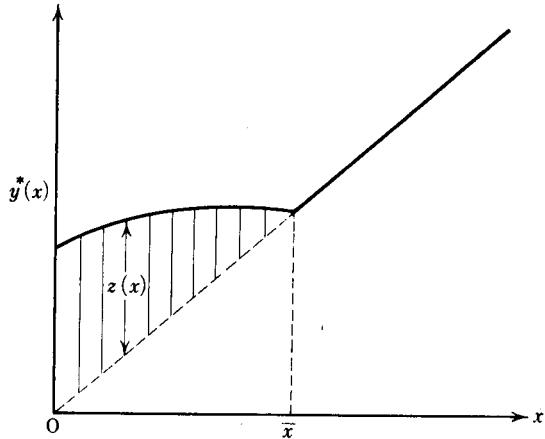
$$z^*(x) = \begin{cases} z(x), & 0 \leq x \leq \bar{x} \\ 0, & x > \bar{x} \end{cases}$$

となるが、 $z(x)$ の形は一般には explicit に求まらない。そこで近似として定水準注文政策

$$\tilde{z}(x) = \begin{cases} L-x, & 0 \leq x \leq L \\ 0, & x > L \end{cases}$$

の中である適当な意味で最適なものを求めよう。

[定理 4] この定水準注文政策を採用するときの全損失(期待値)を $\bar{u}(x)$ とすると



$$\begin{aligned} \lim_{a \rightarrow 1} (1-a)\bar{u}(0) &= \lim_{a \rightarrow 1} (1-a)\bar{u}(L) \\ &= p\beta - (p-k)L + (p-k+c) \int_0^L \Psi_1(t, L) dt \end{aligned} \quad (11)$$

が成立する。ただし

$$\begin{aligned} \beta &\equiv \int_0^\infty v \varphi(v) dv, & \Phi(t) &\equiv \int_t^\infty \varphi(v) dv \\ \Psi_a(t, L) &\equiv \frac{1-a\Phi(t)}{1-a^2\Phi(t)\Phi(L-t)} & (0 \leq a \leq 1) \end{aligned}$$

である。 (11) を最小にするには

$$\frac{c}{p-k+c} = \int_0^L \frac{(1-\Phi(t))\Phi(t)\varphi(L-t)}{\{1-\Phi(t)\Phi(L-t)\}^2} dt \quad (12)$$

のように L を定めればよい。

(例) 需要分布が指數分布

$$\varphi(v) = be^{-bv}, \quad b > 0$$

のときには、(12) は計算の結果

$$\frac{c}{p - k + c} = \frac{e^{-bL}(bL + e^{-bL} - 1)}{(1 - e^{-bL})^2} \quad (12)'$$

となる。これから L が一意的に定まることを見るには、次のようにしてもよからう：

$e^{-bL} = x (0 < x < 1)$ とおくと上の式の右辺は

$$-\frac{x \log x}{(1-x)^2} - \frac{x}{1-x} \quad (13)$$

に等しい。これは Taylor 展開

$$\log x = -(1-x) - \frac{(1-x)^2}{2} - \frac{(1-x)^3}{3} - \dots \quad (0 < x < 1)$$

を使って変形すると結局

$$\begin{aligned} & x\left(\frac{1}{2} + \frac{1-x}{3} + \frac{(1-x)^2}{4} + \dots\right) \\ &= \frac{1}{2} - \left(\frac{1}{2} - \frac{1}{3}\right)(1-x) - \left(\frac{1}{3} - \frac{1}{4}\right)(1-x)^2 - \left(\frac{1}{4} - \frac{1}{5}\right)(1-x)^3 - \dots \end{aligned}$$

となることがわかる。この式から (13) は $(0, 1/2)$ の範囲内の値をとる増加函数、したがって (12)' 右辺は L につき減少函数であることがわかる。かくして

$$p > c + k$$

ならば (12)' はただ一つの根を有する。

3. 略 証

簡単な証明を付する。

定理 2 の証

(3) 右辺の [] 内を y で微分して 0 とおくと

$$c + k + a \left\{ -u(0)\varphi(y) - p \int_y^\infty \varphi(v) dv + u(0)\varphi(y) + \int_0^y u'(y-v)\varphi(v) dv \right\} = 0.$$

これと $u'(x) = -k$ とかから (4) が出来る。

$ap > c + k$ ならば (4) は唯一つの正根をもつ。それを \bar{x} とすると最適在庫政策は
 $y^*(x) = \max(\bar{x}, x)$.

$u(x)$ の形をきめるには、 $x > \bar{x}$ に対して

$$u(x) = cx + a \left\{ \int_x^\infty (p(v-x) + u(0))\varphi(v) dv + \int_0^x u(x-v)\varphi(v) dv \right\}$$

これに $u(x) = k(\bar{x}-x) + u(\bar{x})$ ($x < \bar{x}$) を代入して

$$\begin{aligned} u(x) &= cx + a \left\{ \int_x^\infty (p(v-x) + k\bar{x} + u(\bar{x})) \varphi(v) dv + \int_0^x (k(\bar{x}-x+v) + u(\bar{x})) \varphi(v) dv \right\} \\ &= cx + a(k\bar{x} + u(\bar{x})) + ap \int_x^\infty (v-x) \varphi(v) dv - ak \int_0^x (x-v) \varphi(v) dv. \end{aligned}$$

この式において $x = \bar{x}$ とおき

$$c + k = a \left(p \int_{\bar{x}}^\infty + k \int_0^{\bar{x}} \right) \varphi(v) dv$$

を利用して変形すると (5) を得る.

定理 3 の証

(7) 右辺の { } 内の函数は y につき減少函数だから

$$\begin{aligned} u(x) &= \min \left[a \left\{ (M + u(0)) \left(1 - \frac{x}{S} \right) + \frac{1}{S} \int_0^x u(x-v) dv \right\}, K + \frac{a}{S} \int_0^S u(S-v) dv \right] \\ &= \begin{cases} K + \frac{a}{S} \int_0^S u(S-v) dv, & 0 \leq x \leq \bar{x} \\ a \left\{ (M + u(0)) \left(1 - \frac{x}{S} \right) + \frac{1}{S} \int_0^x u(x-v) dv \right\}, & \bar{x} \leq x \leq S \end{cases} \quad (14) \end{aligned}$$

ここに \bar{x} は方程式

$$\begin{aligned} &a \left\{ (M + u(0)) \left(1 - \frac{\bar{x}}{S} \right) + \frac{1}{S} \int_0^{\bar{x}} u(\bar{x}-v) dv \right\} \\ &= K + \frac{a}{S} \int_0^S u(S-v) dv \quad (15) \end{aligned}$$

の唯一つの根である. 最適政策は

$$y^*(x) = S, (0 \leq x < \bar{x}), = x (x \geq \bar{x}).$$

(15) は

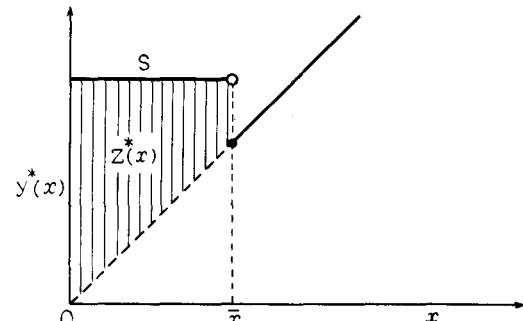
$$a(M + u(0)) > K + u(S) \quad (16)$$

なる限り根をもつ.

(14) から $u(x)$ を定めよう. $u(x) = u(0) (0 \leq x \leq \bar{x})$ を (14) に入れて

$$u(x) = a \left\{ (M + u(0)) \left(1 - \frac{x}{S} \right) + \frac{1}{S} \left(\bar{x}u(0) + \int_{\bar{x}}^x u(v) dv \right) \right\}$$

$$\therefore u'(x) = \frac{a}{S} \{ -(M + u(0)) + u(x) \}, \quad \bar{x} < x < S.$$



この微分方程式を初期条件 $u(\bar{x}) = u(0)$ のもとに積分すると (9) の下式が出る. $x \geq S$ での $u(x)$ を定めるには (7) から

$$u'(x) = a(u(x) - u(x-S))/S$$

これは $[nS, (n+1)S]$ で次々に線型微分方程式になるから、これらを解けばよい.

(15) をかき直すと

$$a \left(M + u(0) - \frac{M}{S} \bar{x} \right) = K + \frac{a}{S} \left(u(0) \bar{x} + \int_{\bar{x}}^S u(v) dv \right)$$

$$\begin{aligned}\therefore K &= aM \left\{ 1 - \frac{\bar{x}}{S} - \frac{1}{S} \int_x^S (1 - e^{a(x-\bar{x})/S}) dx \right\} \\ &= M(e^{a(S-x)/S} - 1)\end{aligned}$$

これから(8)が出る。 $0 < \bar{x} < S$ なための条件は $0 < \log(1 + K/M)/a < 1$, すなわち

$$M > K(e^a - 1)^{-1}$$

である。 \bar{x} の値が定まった後は

$$u(0) = a \left\{ (M + u(0)) \left(1 - \frac{\bar{x}}{S} \right) + \frac{1}{S} \int_0^{\bar{x}} u(\bar{x} - v) dv \right\}$$

から $u(0)$ の値が定まる。 $u(0)$ の値は K および M とともに単調増大である。これらの値は(16)を満足する。

定理4の証

(10) から

$$\bar{u}(x) = \begin{cases} cx + k(L-x) + a \left\{ \int_x^\infty (p(v-x) + \bar{u}(L-x)) \varphi(v) dv + \int_0^x \bar{u}(L-v) \varphi(v) dv \right\}, & 0 \leq x \leq L, \\ cx + a \left\{ \int_x^\infty (p(v-x) + \bar{u}(0)) \varphi(v) dv + \int_0^x \bar{u}(x-v) \varphi(v) dv \right\}, & x > L \end{cases} \quad (17)$$

が得られる。上の式を微分して

$$\bar{u}'(x) = c - k - a(p + \bar{u}'(L-x)) \int_x^\infty \varphi(v) dv, \quad 0 < x < L$$

となり $\bar{u}'(x)$ の定差方程式である。これを解くと

$$\bar{u}'(x) = (p - k + c) \Psi_a(x, L) - p.$$

積分すると

$$\bar{u}(x) = \bar{u}(0) - px + (p - k + c) \int_0^x \Psi_a(t, L) dt, \quad 0 < x < L$$

この式で $x = L$ とおいたものと、(17)で $x = 0$ とおいて得る

$$\bar{u}(0) = kL + a(p\beta + \bar{u}(L))$$

とから(11)が示される。

(11)を L につき微分して 0 とおけば(12)が出る。(12)の根が唯一つしかない、すなわち(11)右辺が unimodal なことは

$$p\beta + cL + (p - k + c) \left\{ -L + \int_0^L \Psi_1(t, L) dt \right\}$$

と変形してみれば明らか。

$$-L + \int_0^L \Psi_1(t, L) dt$$

が非負減少函数であるからである。